先進校に学ぶキャリア教育の実践　CASE 1

岩手・県立 盛岡商業高校（もりおかしょうぎょう）

実社会で求められる力と態度の育成に他校を巻き込みながら取り組む

取材・文／藤崎雅子

≫実践ノウハウ

- 学校生活のあらゆる場面でキャリア教育を実践
- 学校経営計画書をもとに確実に実践・評価・改善
- 他校を巻き込む実践で県全体のキャリア教育推進に貢献

岩手県中心部に位置する県立盛岡商業高校は、県内商業高校のセンタースクールと位置づけられる伝統校だ。とくに就職面では地域から高い評価を得てきた。数年前からは、進路指導のさらなる強化とともに、商業教育をベースとした〝実践的〟キャリア教育を全校体制で推進。2年連続で進路決定率100%を達成するなどの成果をあげている。ただし、同校が目指すのは単なる就職実績の向上でなく、生徒一人ひとりの「社会をたくましく生き抜く力」の育成だ。2年前に着任した民間出身の校長の知識と経験を活かすなど、社会や企業の実状を踏まえた実践が、学校と生徒に変化をもたらしているようだ。

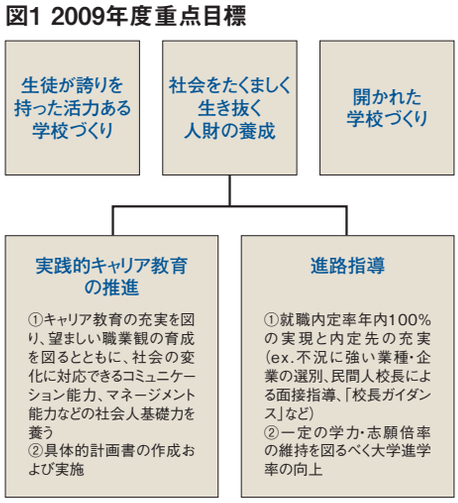
朝のHRや教科学習でも日常的にキャリア教育

進路指導と対になって「社会をたくましく生き抜く力」の育成を目指す同校のキャリア教育（図1）は、建学の精神を冠して「『士魂商才』人材育成プラン」という。

大きな特長は、朝のHRから部活動まで、学校生活のあらゆる場面においてキャリア教育が意識されている点だ（図2）。たとえば、コミュニケーションの基本である、あいさつやマナー。朝のHR時はもちろん、廊下で教員や来校者とすれ違う時のあいさつも徹底した指導がなされている。授業規律の確立にも力を入れ、「授業の始まりと終わりのあいさつを厳格に行い、指名されたら返事をし、起立して答える」ことで社会性のある行動を定着させるねらいだ。このほかにも、社会への関心を高めるためにクラスごとに新聞を購読しているが、その記事をもとに1分間スピーチを毎朝実施するなど、社会人としての基礎力育成が日常的に行われている。

また、LHRや総合的な学習の時間を利用した3年間のプログラムも構築されている（図3）。1学年では自己理解から始め、進路への関心を高めていく。2学年では、学力と人間性の伸長を図るとともに、企業調査や職場・学校訪問等により職業観を育み、将来設計につなげる。3学年では、人生観、勤労観、職業観の確立を目指しながら、進路実現に向けて具体的に行動させる。校外に出掛けて企業や上級学校の現場を知る機会が充実しており、レポート発表などプレゼンテーションの場も数多く組み込まれている。

図1 2009年度重点目標



>>School Data
流通ビジネス科・会計ビジネス科・国際ビジネス科・情報ビジネス科／1913年創立
生徒数／763人（男子318人・女子445人）
進路状況（2008年度実績）／大学 10.1%・短大 4.3%・専門学校 26.1%・就職 59.4%
岩手県盛岡市本宮2-35-1
TEL 019-636-1026
URL http://www2.iwate-ed.jp/moc-h/

Process 立ち上げのプロセス

従来の実践をもとに3年間を体系化

同校がキャリア教育に力を入れるようになったのは、2007年度、金融機関出身の馬上達幸先生が校長に着任したのがきっかけだ。当時の状況について馬上校長先生はこう振り返る。

「商業教育を通じて社会で必要とされる知識や技術の習得に努めてきた本校ですが、変化の激しい現代社会をたくましく生きるためには、キャリア教育を充実させる必要性を感じました。折りしも数年後に創立100周年を控え、改革の機運が高まっていた時期。その追い風を受けて100周年に向けた中期目標を立て、キャリア教育を中心とした改革を進めてきました」

校長から指名を受けた西里孝義先生らは、キャリア教育実践に向けた準備を担当。先進校視察やインターネット、全国進路指導協議会などの機会を活かして情報収集し、同校独自のキャリア教育プログラム「士魂商才人材育成プラン」を発案した。

「新たにプログラム名を付けたものの、中身はゼロから作ったわけではなく、これまでの実践を見直し発達段階に合わせて体系化したものです。新規の活動は多くありませんが、1学年がバスで様々な企業や上級学校をめぐる『職場・学

図2「士魂商才人材育成プラン」各領域における指導内容

各教科	特別活動	総合的な学習の時間	日常生活・その他
①授業で、成就感・達成感・自己有用感を育む ②将来の職業生活に必要な権利、義務等の知識、技能の習得 ③自他の生き方を探求し、社会の変化等を学び、進路選択の力を身につける ④自己の能力、適性を知り、それを伸長させる自己教育力を育む	①生徒一人ひとりがクラスでの役割をもち、責任感と存在感をもてるようにする ②コミュニケーションによる人間関係の構築の大切さを学び、社会の一員としての役割を学び、チームの重要性を身につける ③他者の個性を尊重、理解し、自己理解の認識を深める	①「自己の在り方生き方を考えることができるようにする」（学習指導要領より） ②「産業社会」とともにキャリア教育の核として様々な問題解決のために、自ら考え、主体的に行動できる人材を育む ③諸能力のすべてを網羅する、集大成と位置づける	①日常生活で積極的な生徒指導の充実を通して、規範意識やマナーを育む ②異年齢集団活動によって、「人とかかわる力」を育成し、協働の心を育む ③保護者・地域社会、幼保小中・上級学校と連携をとり、連携ネットワークを構築する ④就労体験・奉仕活動等による自己有用感、社会性を育む

図3 LHRと「総合的な学習の時間」のプログラム内容

学年	1学年（実施時間 LHR）		2学年（実施時間 総合学習）		3学年（実施時間 総合学習）	
目標	自己探求＝「キャリア基礎」		自己創造＝「キャリア開発」		自己確立＝「キャリア発達」	
4月	自己を理解する	キャリア教育とは	自己を創造する	キャリアガイダンス レッツスタート高校2年生 進路希望調査	自己を確立する	進路希望調査 進路先が決まったら
5月		高校生レッツスタート		キャリア探索プログラム 事前指導		進路先へジャストフィット
6月		入門自分発見 心理検査で自分発見	職業を理解する	キャリア探索プログラム 職場・学校見学実施、まとめ	進路目標の設定	仕事選びのステップ 就職条件を整理しよう
7月		私の履歴書を作ってみよう 進路適性検査		基礎力診断テスト キャリアガイダンス（外部講師）	進路実現に向けて	履歴書の書き方 面接の受け方（基本） 自己PRについて 面接の受け方（実践） コミュニケーションスキルズ 伝える力を身につけよう
8月	職業を理解する	職業いろいろ発見 興味ある職業について調べよう	職業を体験する	インターンシップ キャリア体験プログラム （工業高校との連携授業）		
9月	職業を体験する	キャリア体験プログラム 職場・学校見学			就職選考・受験 進学先選考・受験	フォローアップ研修 社会人としての心構え ライフプランを考える
10月		キャリア体験プログラム 職場・学校見学発表会	将来設計	キャリア体験プログラム まとめ 実力診断テスト、適性検査		
11月						
12月	将来を設計する	高校3年間の設計図	進路を考える	社会人講話		
1月	進路目標の設定	進学いろいろ発見 就職いろいろ発見		進路希望調査 進路リアル体験（先輩と語る会）	社会人・学生 としての心構え	
2月		進路希望調査 次年度に向けての抱負		次年度に向けての抱負		
3月						

キャリア教育推進担当部
三河光博先生

キャリア教育推進担当部
齊藤達正先生

キャリア教育推進担当部長
西里孝義先生

校長
馬上達幸先生

校見学』や、2学年の希望者が工業高校で工業の基礎を学ぶ『キャリア体験プログラム』など、学校外との接点をもつ活動を充実させました」（西里先生）

08年度からはキャリア教育推進担当部を発足させ、西里先生が部長に就任。進路指導や教務とのスムーズな連携のため、同部は進路指導部内に設置され、西里部長は教務部副部長も兼務する。当初、西里先生がもっとも課題に感じたのは教職員の共通理解だったが、大きな混乱なく進めることができたという。

「『キャリア教育とは？』と理屈から入るのではなく、まず実践して『今やっているのがキャリア教育なのだ』と実感してもらうようにしました。それが先生方にはわかりやすかったのかもしれません」（西里先生）

教員の社会性や規範が生徒の行動・態度に影響

社会性や規範意識の育成のために、教員自らが率先して態度で示すことから始められた。授業はチャイムが鳴る前に教室に入室。企業からの来客も多いなか名刺の受け渡しや服装にも気を配り、電話はベル3回以内で取る。2学年のインターンシップ時は単に引率するだけでなく、教員自身も学ぶ姿勢で参加するようになった。そうした教員の姿勢や態度が生徒に及ぼす影響は、決して小さくないと思われる。

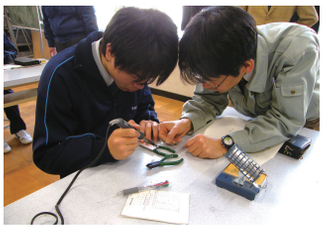
今年度は、各教科におけるキャリア教育の充実に力を入れている。シラバス集にある各科目の到達目標の欄には、「コミュニケーション能力」や「自ら考え主体的に行動」などキャリア教育で育まれるべき諸能力について記載されており、これらを意識して授業が行われるようになってきているという（図4）。なかでも教科「商業」はキャリア教育を取り入れやすい教科として、重要性を教員間で共有。知識や技術の習得だけでなく、規範意識や責任感など、社会人に求められる豊かな人間性を育む指導に力を入れていく方針だ。

図4 各科目の学習到達目標の例（シラバス集より抜粋）

科目	学習の到達目標
英語Ⅱ	1.英語の4技能を用いた活動を通じ、英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる 2.既習の語彙、イディオム、重要構文等を正しく捉え英文を理解し、同時に背景や関連知識から自分の考えや意見を述べる力を育てる
世界史A	○諸地域世界の風土や人々を理解し、その世界の成立と一体化の過程を把握する ○現代の諸課題を、世界的視野にたって見つめることができる ○歴史的知識を基礎に、諸課題に対して自ら考え、主体的に行動できる
国語表現Ⅰ	進学希望者を中心に、推薦入試の小論文対策として、前期は小論文の書き方の基本をマスターする。後期中頃までは入試対策問題演習とし、テーマの捉え方、論文展開法を身につけ、添削を通して小論文の書き方を徹底的に学習する。後期は、ディベート等「聞く、話す」活動も取り入れ、コミュニケーションのスキルを身につける

図5 分掌ごとの推進計画書と年度末反省（進路指導部の例）

分掌	進路指導部													全期		
項目	数値・行動目標	担当者	実施時期（月）：上段計画⇔、下段実施												達成度	成果と課題
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	数値	評価	
渉外・事務	全体企画・選考会議	三浦秀	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施		◎	選考会議においては3学年団の先生方と連携を図りながら、スムーズに円滑に運営出来た。
	受験報告書	千田						⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施		◎	書式を新しく工夫し、来年度以降も有効に活用出来る。3学年担任団の生徒への記入指導の徹底がはかられていた。
	進路学習資料	高橋幸	⇔ 実施										⇔ 実施	⇔ 実施		○	概ね良好
進学指導	進学指導企画（大学）	堀江	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施		○	短大を含め40人となったが、来年度は50人を目標としたい。1・2年次から進学模試を受験させ、大学ランキング等を知ることも進学意欲の向上に繋がると思われる。
	進路指導企画（専門学校）	高橋幸	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施		○	概ね良好
就職指導	就職指導企画・運営	鈴木卓	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	100	◎	1月に164名全員が内定出来たことは、校長先生をはじめ3学年担任団の指導の成果である。
	進路委員指導・面接指導計画	大石	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施	⇔ 実施				◎	先生方のご協力により、実施することが出来た。最後の1月までご指導いただき、心から感謝申し上げる次第である。



工業高校での「キャリア体験プログラム」のようす。製造業の経営や業務内容等に関する講義のあと、CADの動かし方やはんだづけなどの実習も行われた

同校全体および各分掌の経営方針、計画や反省が集約された「学校経営計画書」

Close up ① 学校経営計画書

統一フォーマットで分掌・教科ごとに目標管理

開始3年目でキャリア教育のプランが安定稼動している背景には、「学校経営計画書」の存在が考えられる。

同校の「学校経営計画書」は、学校全体のほか分掌・教科ごとの方針や年間計画がまとめられた、80ページを超える冊子だ。以前から1枚程度の経営計画書は作成されていたが、その重要性を指摘する馬上校長先生のてこ入れで昨年からこのような形式に変更。「実践的キャリア教育の推進」もこの中に明記され、教職員で共有されている。

経営計画書の作成には、教員全員がかかわる。すべての分掌・教科が統一フォーマットを用い、重点目標や具体策、実施に向けた詳細な計画を作成しているからだ(図5)。確実な実践につながるよう、計画書には課題ごとに担当者と実施時期が明記される。こうした作業による教員の負担増が懸念されるが、キャリア教育推進担当部の齊藤達正先生は否定する。

「従来はばらばらで煩雑だった書類が整理されて明確になったため、かえって作業が減ったように感じます。自分たちの目標を自分たちで作るということで、モチベーションが上がり、実践力もついてきたのではないでしょうか」

また、各分掌・教科の目標と計画は、秋に中間評価、年度末には年間の評価が行われ、次年度の目標設定や計画に活かされる。

「前年のキャリア教育推進担当部を振り返ると、計画の詰めが甘くて中途半端に終わってしまった取り組みもあります。他の分掌の先生方にもヒアリングし、今年度の改善に活かしました。今後はアンケート形式で広く改善案を拾っていく体制を整えていきたいと思います」(西里先生)

運用については発展途上の段階だが、この学校経営計画書は県教委が高く評価しており、〝盛商スタイル〟として全県で取り入れるよう指導しているという。

図6 キャリア体験プログラムの生徒レポートより

(6) 全体を通じての、感想を書いてください。

いつも盛商では、簿記や、情報の勉強しかしないけれど、盛工の先生方の授業を聞いて、工業系・製造業などが、どのようなものなのかが分かった気がします。また、普段とは違う分野の授業だったので、新鮮な気持ちで授業を聞くことができました。

今回から新しく始まった取り組みで、どんなことをするのかも分からなくて不安だったけど、2年生で進路を決めるにあたってとても役立つことが多かったです。今までは「商業で簿記やってるんだから事務にする。」と思っていたのが、盛工で授業をうけたことによって、製造業も進路選択の範囲に含めようと考え始めることができました。

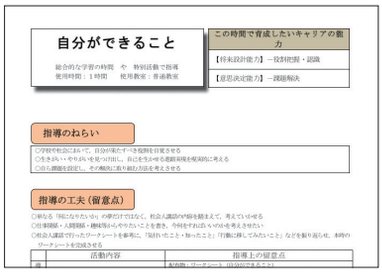
盛工では、CADとよばれるパソコンのソフトで建物の平面図をパソコンでの製図を体験して、とても難しかったけど、楽しかったです。

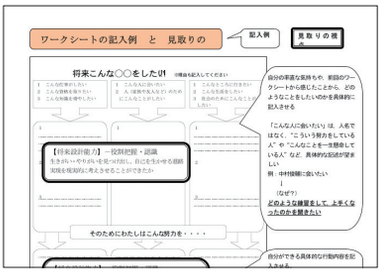
いつもの学校の授業から離れ、他の学校へ行き勉強することは、とても貴重な時間で良い経験だと思いました。来年の就職試験まで、一年はないけれど、これからの学校生活は今回の体験を活かしていきたいし、進路実現に向けて今自分ができる、勉強や各種検定の取得のために努力していきたいと思いました。

Close up ② 他高校との連携

岩手県のキャリア教育のリード校でありたい

もう1つ注目したいのが、キャリア教育の実践や研究を、他校を巻き込みながら進めている点だ。同校教員から口々に聞かれる、「学校単独ではなく岩手県全体の発展を考えたい。それを本校がリードしていきたい」という意気込みが、学校の枠にとらわれない数々の実践を生んでいるようだ。その例をいくつか紹介しよう。





三河先生が作成した、キャリア教育実践のためのCD-Rより。キャリア教育モデルプラン、ワークシート、指導案、指導のポイントなどのデータがあり、各校の状況に合わせて加工し使用できる

まずは、昨年度から2学年で始めた、盛岡工業高校で工業の基礎を学ぶ「キャリア体験プログラム」。商業と直結する職種や業種だけでなく、製造業や工業分野の仕事にも興味を持たせ、生徒の進路の選択肢を広げるのがねらいだ。また、事務系職種であっても製造業に就職すれば現場業務の理解は必要で、製造部門より管理部門への登用もあるため、入社後の業務に役立つとの考えもある。初年度は106人が希望し、3日間で計12時間学習した（図6）。

「昨年は本校生徒による工業高校での体験のみにとどまりましたが、目指すのは近隣の工業高校と農業高校の3校による相互連携プログラムです。専門分野の学習を相互に提供し、各校の進路の拡大につなげたいです」（西里先生）

また、県内の商業教育に携わる高校全体でキャリア教育を推進していこうと、同校の提案により岩手県高等学校教育研究会商業部会において「キャリア教育分科会」が2年前から発足した。年2回の研究会を開催し、キャリア教育の必要性の確認や、実践に向けた情報交換が行われている。夏休みを利用した教員の企業研修も、同校教員が中心となって始めた。昨年はスーパーと銀行で3～5日間の研修を実施。同校の商業科の教員は全員研修を済ませており、今後は普通教科の教員にも広げていくという。

こうした研究部会等を通じて、同校での実践方法は積極的に他校に情報提供されている。キャリア教育推進担当部の三河光博先生は昨年度、岩手県総合教育センターの長期研修生としてキャリア教育の研究を行っていたが、その研究成果の資料を1枚のCD-Rに収めて希望校に配布しているという（ページ上写真参照）。

「キャリア教育について、何から始めてよいかわからないのが各校の実態では。本校の実践やノウハウをもとに、多くの学校でキャリア教育の取り組みが進めば嬉しいです」（三河先生）

県全体で発展していこうとする同校の動きは、キャリア教育の面に限ったものではない。岩手県は今年度から、高卒就職の求人件数の多い高校が県教委に求人情報を提供して高校間で求人を共有するという試みを開始し、全国から注目を集めているが、これも比較的恵まれた求人が集まる同校が、県内の厳しい高卒就職の状況を改善するために県に働きかけて実現したものだ。

●

同校生徒の状況を表す数字は、この数年間で大きく変化した（図7）。5年前と比べて昨年度の欠席者数や遅刻者数は3分の1近くに、早退者数は5分の1近くに減少。一方で資格取得者数は大幅に上昇し、就職内定率は2年連続で100%を維持している。これは単なる生活指導や資格取得指導だけでなく、「キャリア教育をベースとした指導の効果」と西里先生は話す。

「以前は自分の進路について『どっちでもいいや』という態度の生徒も少なくなかったのですが、『こういうことをやりたい』とはっきり言える生徒が増えてきました。将来に対する前向きさが生活態度にも表れているのだと思います」

馬上校長先生は今後の展望をこう語る。

「本来は『卒業生がどこの会社に何人入ったか』よりも『卒業生が将来どこでどう活躍して社会に役立っているか』が大事。そうした意味で進路指導の質の高さを誇れる学校であるために、就職や進学の後を見越した長い目で見た人づくりをしていきたいですね」

そのためにはまだ中学校や大学との縦の連携、家庭や地域との横の連携の弱さが課題となっており、強化を図る方向だ。さらに、離職状況をリサーチして指導に活かしたり、日本版デュアルシステムの導入なども検討していくという。

図7 生徒状況の変化

項目		2008年度	2007年度	2003年度
学校生活の状況	のべ欠席（3学年）	299	725	824
	のべ遅刻（3学年）	242	414	681
	のべ早退（3学年）	70	253	340
	不登校	0	2	5
	進路変更（退学）	0	2	11
資格取得状況	全商1級3種目以上	79	41	3
	日商簿記2級	42	12	6
	基本情報技術者	2	0	0
	初級シスアド	8	2	0
進路状況	就職内定率	100%	100%	88.5%
	大学進学者数	40	32	44
PTA	PTA総会出席率	21%	9.8%	

※2003年度は8学級。斜線はデータなし
「初級シスアド」は09年度春期試験をもって廃止され、新たに「ITパスポート試験」が開始